

大学と地域の連携による子育て支援の実践報告Ⅱ

— 障がい児支援団体との連携を中心に —

The Coordination between a College and a Community for Improved Family ServiceⅡ: Co-ordinated Service Planning for Disabled Children and Young People

(2011年3月31日受理)

槇尾真佐枝 上田 敏丈 福 知栄子
Masae Makio Harutomo Ueda Chieko Fuku

Key words : 障がい児支援, 学生ボランティア, 地域連携

抄 録

本稿は、今年度1年間を通じて、障がい児・者支援団体「岡山市手をつなぐ育成会」と本学子ども学科が連携しながら行った一連の活動の実践報告である。「和太鼓サークル」「ダンスサークル」「親子サマースクール」等の活動を年間計14回実施するなかで、障がい児とその家族の余暇時間の充実を図るとともに、学生の障がい児に対する理解を深め、その具体的支援スキルを学ぶ事を目的とした。その目的については、ほぼ達成できたが、活動を展開していくなかで中心となるべき「子ども」の意見を充分聴き取ることができなかった。その反省をふまえながら、来年度も引き続きこの連携活動を実施していきたい。

1. はじめに

近年、障がい者福祉においてはその制度をめくり、抜本的な改革論議が進められている。これらの動きの中で注目すべき特徴は、徹底した障がい当事者の参画である。これは、今まで障がい当事者の声があまりにもないがしろにされてきた事への反省が出発点となっていると思われる。障がいに関する生活問題の原因をその障がいを有する個人に帰結することなく、問題とさせている社会全体のあり方へと目を向け、共に「当事者」として協働していくことこそが、障がいのある人の権利回復の可能性を見出す、一番の方法ではないかと考える。(朝日、2010)しかし、そのような動きが盛んであるにもかかわらず、実際の暮らしの中で、障がいのある人が、障がいのない人と「共に暮らしている」社会が実現できているだろうか。

そこで改めて障がい児の暮らしについて考えてみたい。

子どもたちは、学校のある期間は障がいがある・ないに関わらず、1日の大半を学校で一緒に過ごし、同じ空間の中で共に暮らしている。しかし、放課後や長期休暇の暮らしに目を向けた時に、はたして障がい児は障がいのない子どもと同じ暮らしができていだろうか。本来子どもは、放課後、あるいは長期休暇の余暇時間の過ごし方として、自分の好きな活動や遊びを選び、好きな場所や友達を選び、地域の中で活発に自発的に遊びを展開していくことができている。しかし、障がい児においては、なかなか外出も思うようにできず、友達との関わりもほとんど持たず、自宅での遊びが中心となり、関わるのは母親を初めとする家族に限定されることが多いのが現状である。一般的にいう「子どもらしい」あるいは「青年らしい」生活をしているとは言い難い状況が見えてくる。また、一方で学生たちは、今までの暮らしの中で「障がいのある子ども」「障がいのある人」と接したことがほとんどなく、その存在を知らない学生が多い。なぜ、そのようなことが起きるのか。それは、現代において、障

がい児・者を受け入れていない事実があるからではないだろうか？今まで接点がなかったということは、同じ社会、地域で生きているにもかかわらず、交わりがなかったことを示している。

どのようにすれば、同じ社会で「共に生きていくこと」ができるのか、という事を念頭に置きながら、2010年度6月より、実施してきた「岡山市手をつなぐ育成会」（以下、本稿では「育成会」とする）と本学子ども学部子ども学科（以下、子ども学科）の学生ボランティアとの連携活動について報告すると共に、実践内容について検討する。

2. 活 動 目 的

「育成会」と「本学」の連携活動を開始するきっかけとなったのは、育成会の方から本学へ子ども支援活動における学生ボランティアの要請依頼があったためである。子ども学を学ぶ学生たちの若い力と子ども支援スキルを活かす場として「育成会」メンバーと一緒に活動を始めることとした。なお、この活動は、子ども学科地域協働検討委員会の活動の一環であり、障がい児支援の経験をもつ大学ボランティア・コーディネーターが活動支援にあたった。

まず、大切にしたいことは、子どもが取り組みたい活動を一緒に進めることである。多くの活動のなかのひとつとして「和太鼓」という希望が挙がってきた。育成会のメンバーからは「和太鼓演奏をやりたいけれども、できる場所もなく、その方法もない」という訴えがあった。そこで、本学の和太鼓サークル「鼓魂」を紹介し、1年間を通して連携活動を展開していくことについて計画を立てた。

その後、育成会の方と本学が、様々な活動を実施することにより、お互いが理解し合い、そして高め合えるように次の2点を活動の目的とした。

1) 「育成会」サイドの目的

従来、障がい児・者の休日などの余暇は主に家族が担ってきた。そうした障がい児・者が、家族以外の人（学生ボランティア）と出会い、一緒に有意義な余暇を過ごすことにより、社会に出て行く力「自立する力」を身に付けるとともに、生活の質を高めていく手がかかりとなるこ

とを目的とする。

2) 「大学」サイドの目的

学生ボランティアが知的障がい児・者への理解を深めると共に、障がい児・者とその家族への具体的な支援スキルを学ぶ事を目的とする。

3. 実 践 内 容

1年間を通じて以下の連携活動を実施した。

①太鼓サークル（4回）②ダンスサークル（3回）③親子料理教室（2回）④親子サマースクール（3回）及びバス旅行（2回） 合計14回

どの活動においても活動前には打ち合わせを行い、活動後には育成会の運営メンバーと参加学生において反省会を実施した。

また、「先輩お母さんのお話を聞く会」（H22. 9.10：岡山市福祉文化会館にて実施）にも招かれ、学生6名が参加し、障がい児を抱える家族の気持ちについて学びを深めることができた。

「育成会」と本学が連携を持ち、年間を通じ様々な活動を共に実施してきたことにより、それぞれの活動を通して、参加者や学生がどのように変容していったかを以下に述べる。

①和太鼓サークル（全4回）（「表1」参照）

本学の和太鼓サークル「鼓魂」のメンバーが中心となって指導にあたった。参加者の年齢が、就学前の幼児から大人までと大変幅広く、初回は育成会の方も学生も緊張し、手探りの状態から開始した。とりわけ参加者は、普段関わることがない学生の存在に緊張していたが、今まで触れたことのなかった「和太鼓」という媒体を通して、その音色、振動、迫力に魅力を感じたようで、回を重ねるごとに参加者が増加していった。また、活動後すぐに次回の申し込みをする参加者の姿も多く、「和太鼓サークル」を大変楽しみにしていることが伺えた。

学生は活動後毎回実施する反省会で「どうすれば参加者に喜んでもらえるか？」ということに常に気を配っていた。特に1回目の活動終了後、指導の仕方が参加者の特性に合っていなかったことに気づき、2回目の活動に合わせて『であったね』というオリジナル曲を作曲し、活動の中で育成会にプレゼントをするとともに、参加者

が太鼓を叩きやすいようなリズム打ちを心がけた。また、太鼓の高さや向きなどにも個々に応じて配慮してことにより、参加者がより太鼓の演奏を楽しめるようになっていった。さらに、2回目の活動では、体力的に弱い参加者が貧血で倒れたのを見て、次回からはこまめな休憩と水分補給を心掛ける等の細かい面にも配慮できるようになった。その結果、回を追うごとに、プログラムの内容や支援の仕方が参加者のニーズにより応えていくものへと変化していった。

また、1回目から通して、プログラムのラストで踊っている「うらじゃ音頭」は今年度の「岡山市障がい者体育祭」のプログラムに採用されたことも手伝って、年間を通じて親しむことができた。

3回目の活動以降は、「鼓魂」の学生だけでなく、他の活動で関わっていた学生が参加者のサポートをするために自主的に参加するようになった。その結果、より活動内容が充実するとともに、学生同士の関わりも深まっていた。

表1. 「和太鼓サークル」活動一覧表

日 時	参 加 者
第1回 6月13日(日)	知的障害児・者 20名 保護者・兄弟 19名 学生・講師 9名 育成会 7名 計 55名
第2回 9月5日(日)	知的障害児・者 21名 保護者・兄弟 25名 学生・講師 7名 育成会 7名 計 60名
第3回 10月24日(日)	知的障害児・者 30名 保護者・兄弟 29名 学生・講師 5名 育成会 7名 計 71名
第4回 1月29日(土)	知的障害児・者 24名 保護者・兄弟 26名 学生・講師 6名 育成会 6名 計 62名

②ダンスサークル（全3回）（「表2」参照）

運動不足になりがちな障がい児のために、しっかり動ける活動を展開していきたいという目的を持って実施した。

初回は本学の「ダンスサークル」のメンバーが中心となって指導にあたった。「和太鼓」同様、参加者は、幼児から大人までと幅広かった。初めはどのようなダンスをすれば、参加者に喜んでもらえるのかわからず、学生がいつも踊っている「ヒップホップ」に挑戦してみたが、リズムが速すぎたり、振り付けが難しすぎたりして、参加者の反応はあまりよくなかった。

そこで、反省会と打ち合わせ会を実施し、育成会の方と共に試行錯誤を重ねた。話し合いを重ねるうちに「よく耳にするCM曲やヒット曲を使用してはどうだろうか」という意見が出た。何人かの家族にどんな曲が好きなのかをリサーチし、2回目の活動に「嵐」のヒット曲を使用したところ、参加者の反応がよく、しっかり踊ることができた。しかし、ただ、踊るだけでは参加者の集中が長続きせず、途中で帰宅してしまった参加者がいた。

その反省をふまえ、3回目の活動では、ただ踊るだけでなく「なべなべそこぬけ」「おいかけっこ玉入れ」等の“ふれあい遊び”も取り入れた。また、見せるダンスと一緒に踊るダンスで、プログラムにメリハリを付けたところ、参加者全員が最後まで楽しむことができた。

ダンスのプログラムのなかで、普段使わない筋肉を使う体操や苦手な動きなども入っていたものの、学生と一緒にすることにより、参加者は楽しそうに踊り、その様子を見て家族の方も喜んでおられた。

このダンスにも、他の活動に加わっている学生ボランティアたちが合流したことで、子どもとのダンスプログラムにいろいろなアイデアが集まり、よりよい活動へとつながったと考えられる。

この活動には障がいのある大人の方も多かったことから、初めはどのようにして参加者と関わってよいかかわらない学生が多かったが、回を重ねるごとに表情が和らぎ、休憩時間に参加者と談笑する学生の姿も多く見受けられるようになった。

表2. 「ダンスサークル」活動一覧表

日 時	参 加 者
第1回 7月11日(日)	知的障害児・者 11名 保護者・兄弟 16名 学生・講師 9名 育成会 6名 計 42名
第2回 9月11日(土)	知的障害児・者 14名 保護者・兄弟 17名 学生・講師 9名 育成会 6名 計 46名
第3回 11月7日(日)	知的障害児・者 10名 保護者・兄弟 12名 学生・講師 15名 育成会 6名 計 43名

③親子料理教室(全2回) (「表3」参照)

初回は、本学料理サークル「cooking mama」が支援を計画し実施にあたった。メニューは「ぶっかけうどん」で一緒に調理をして、おいしくいただいた。参加者は重度の障がいを抱える子どもとその母親であった。各家族に1人の学生がサポートをする形で実施された。しかし、料理教室当日に初めて出会ったこともあり、障がい児とどのようにして関わってよいかわからず、戸惑いを隠せない学生が多かった。参加者との距離感に悩む姿も見られた。しかし「料理をする(うどんを伸ばす・切る・ゆでる)」「できたら食べる」という明確な行動のなか、子ども達と一緒に料理をするなかで、徐々に親睦を深めていくことができたようだ。子どもと親しくなるにつれて言語が無くても、子どもの表情や動作などでコミュニケーションが取れることを体得していったようだ。

2回目は、講師の指導の下「ブッシュ・ド・ノエル」を作って、一緒にいただいた。この回は前回の反省を踏まえ、専門の調理指導者に来てもらった。学生も落ち着いて子どもたちと関わり、また、母親としっかり話をすることで障がいに対する知識、支援スキル等を身に付けていった様子であった。

表3. 「料理教室」活動一覧表

日 時	参 加 者
第1回 7月17日(土)	育成会会員・親子5組 12名 学生・講師 8名 育成会 4名 計 24名
第2回 12月12日(日)	育成会会員・親子5組 13名 学生・講師 7名 育成会 4名 計 24名

④親子サマースクール(全5回中、3回を本学が担当する)とバス旅行(全2回) (「表4」「表5」参照)

事前の打ち合わせを繰り返し行ってから実施した。参加者は幼・小・中学生、高校生とその保護者である。学生は4年生を中心に学生ボランティアを新たに募集し、3回分のプログラムを立てて準備にあたった。事前の打ち合わせで、育成会の方より「サポートカード」(障がいの特徴や好きなこと・嫌いなことなどが書いてある個人カード)を見せてもらっていたのだが、いざ子どもたちを前にして、何をどうしていいかわからない学生が大勢いた。

初回は特に様子がわからず、おろおろしている学生もいたが、その都度活動後に反省会をするなかで、子どもたちが何を求めているかを知ることにより、1回目よりは2回目、2回目よりは3回目と活動内容をより子どもたちのニーズに合わせたものに変えていき、プログラムの内容を充実させることができた。担当の子どもと仲良くなるにつれて、次回への参加する意欲が湧いてきたようだ。子どもたちの喜ぶ姿や母親達の感謝の言葉が、学生たちの励みになっていった。

また、少しの時間(約1時間)ではあったが、母親と子どもが離れる時間を設けたところ、ほとんどの子どもが母親と離れ、学生と一緒に遊ぶことができた。母親たちも驚いていたが、障がいのある子どもや青年たちが、親以外の人々、特に青年たちと一緒に時間を過ごすことの大切さに気づかれたようであった。

サマースクールが終了したのち、子どもや青年と育成会メンバーと学生ボランティアたちは2回バス旅行にかけた。各家族に1人の学生がついてサポートする形で

実施した。ほとんどが「親子サマースクール」に参加していた家族だったので、子どもも学生も再会できたことをお互い喜び合い、より深い信頼関係を築いた活動となった。

また、バスの中で学生たちは、1回目、2回目共にレクレーションを実施した。参加者に喜んでもらい一緒に楽しめるようなクイズやお話の準備に時間を惜しまなかった。実際に子どもたちとその時間を共有できたことにおいても多くの学びがあった。

表4. 「親子サマースクール」活動一覧表

日 時	参 加 者	
第1回 7月27日(火)	知的障害児・者	13名
	保護者・兄弟	17名
	学生・講師	8名
	育成会	7名
	計	38名
第2回 8月6日(金)	知的障害児・者	14名
	保護者・兄弟	13名
	学生・講師	14名
	育成会	4名
	計	41名
第3回 8月12日(木)	知的障害児・者	22名
	保護者・兄弟	22名
	学生・講師	25名
	育成会	7名
	計	69名

表5. 「バス旅行」活動一覧表

日 時	参 加 者	
第1回 9月18日(土)	育成会会員・親子9組	24名
	学 生	7名
	他大学学生	3名
	育成会	3名
	計	37名
第2回 11月21日(日)	育成会会員・親子9組	29名
	学 生	10名
	育成会	3名
	計	42名

4. 実践の評価

1) 「育成会」サイドからの結果報告

知的障がい児・者にとっては、和太鼓、ダンスといったこれまで、望んではいたが実現できなかった活動を学生たちと一緒にしたり、教えてもらったりしながら、新しい楽しみを経験することができた。また、公共の乗り物（路線バス、JR電車等）を使って会場まで来たり、近くのお店で昼食を取ったりと休日の過ごし方に変化があり、通常の子どもや青年がすごすような余暇を経験する機会となった。知的障がい児にとって、学生との楽しい活動は、家族以外の人と親しく関わることの心地よさを感じることができるといえるよい体験となった。また、普段我慢しがちなきょうだい児たちにとっても、学生と思いきり遊んだり、話を聞いてもらったりする経験は大変貴重であった。

特に、男児（中学部・高等部の年齢の子ども）にとっては「話の分かるお兄さん」的な存在の男子学生はとて重要で、年齢相応の関わりをしてくれたり、一緒にトイレに行ってくれたりしたことなどが、保護者からも好評であった。（育成会、2011）

2) 「大学」サイドの結果報告

活動終了後、学生（1年生：14人）にアンケートを実施した。（「表6」参照）

アンケートの結果からもわかるように、連携活動を実施する以前の学生は、障がい児と関わったことがほとんどなく、障がいに対しての知識や認識も持っていなかった。それ故に、活動開始にあたって、不安を抱える学生が大変多かった。しかしながら、これから始まる連携活動に興味を示し、「楽しみである」と答える学生もあり、意欲的に取り組もうとする姿も伺えた。

活動参加後の学生の意識の変化は大きく、ほとんどの学生が「障がい」に対しての認識が変わり、実際に子どもたちと関わるなかで、言葉がなくても伝わるものがあることや、自分にも何かができる事に気づき、障がいのある子ども支援において何が大切かを学んだようであった。また、これからの大学での学習や実習において知識や認識を深めたいという学習意欲の向上も見られた。全員が「来年度も参加したい」と答えたことからその意

識の高まりはわかる。

学生たちは、この活動を通して、知的障がいのある人たちやその家族が日々どのように過ごし、考え、生活しているかに気づいていった。“障がい”のあるこどもや青年は、自分たちと同じように様々なことに挑戦し、一緒に楽しむこと、また言葉のやりとりに困難を覚えたとき、自分たちが伝え方を工夫したり、ちょっとした表情に気づくことで、コミュニケーションがとれるということ等が具体的にわかったようだ。初めのうちは、どのように関わればいいのかわからない学生たちも、子どもたち自身が好きなこと、楽しんでいることを一緒に楽しむことで通じ合う事ができることを体得した。それぞれの学生が試行錯誤を繰り返しながら、知的障がいの人たちへの理解を深めることができたといえよう。活動を重ねるごとに学生の支援スキルがアップし、子どもたちと関わる時の表情がいきいきしてきた。また、実際にこれらの活動を通じて、障がい者福祉施設への就職を決めた学生もいた。

5. 考 察

1) ボランティア・コーディネーターの役割

子ども学科の学生は様々なボランティア活動に関与してきており、参加の意欲も強い。今回の障がい児支援活動を始める際、障がいについての知識や関わり方についての不安をもっている学生が多かった。活動の開始にあたっては、育成会のメンバーとともに、大学のコーディネーターが同席して、親を介した形で子どもの希望（ニーズ）を話しあい、実際に学生が貢献できる活動計画へと進めていった。また、活動実施においても、ほとんどの活動に大学コーディネーターも参加し、学生や子どもや育成会メンバーと一緒に活動している。

さらに、実際に子どもとの活動を進めていくなかで、それぞれの回ごとに、学生が支援にあたって困ったことや工夫したいことなどについて大学のボランティア・コーディネーターが関与して反省会を実施した。障がい児支援の経験のあるコーディネーターが活動内容についてのふり返りをする際に、適切な助言を提供している。学生はこのふり返りで、子どものニーズに即した支援を提供することの重要性に気づいた。例えば、「鼓魂」の

2回目の活動では、参加者のペースに合わせた演奏の仕方を工夫するだけでなく、『であったね』というオリジナル曲を作曲して提供するに至った。

3) 子ども支援活動としてのボランティア活動

参加した学生は、ひとりひとりの子ども支援を介して、知的障がい児・者についての理解を深め、その具体的支援スキルを学ぶプロセスとなった。もちろん、当初は障がいを持つ子どもとの関わり方、特にコミュニケーションの取り方がわからず苦勞する学生が多かったが、年14回の活動を実施するなかで、徐々にその支援スキルを獲得することができた。

そして、同じ子どもとマンツーマンで接する事により、「障がい児」という見方より、「〇〇ちゃん」「〇〇くん」という「個人」として捉えられるようになっていった。親子サマースクールが終了したのちのバス旅行にはほとんどの参加学生が一緒に出かけている。担当の子ども「個人」と関わるなかで、「また、〇〇ちゃんに会いたい」「〇〇ちゃん大好き」という気持ちが芽生え、次の活動への意欲につながったとともに、また、来年もこの活動を引き続き行っていきたいという積極的な気持ちにつながっていったと考えられる。

障がいのある子どもも「子ども」であり「青年」であることを、一緒にする活動の経験を通して学生が発見したプロセスとなった。

4) 子どもと家族と共に進める活動

本活動は育成会の方と一緒に計画し、活動を実施したのち毎回活動後丁寧な反省会を設けている。学生たちは、育成会の方々から子どもとしっかり関わったことを具体的に認めてもらう機会となり、学生たちは「自分ができる事」に気づき自信をもつようになっていった。失敗を恐れず、より意欲的に活動に取り組むことができた。

今年度、各活動の前後には必ず打ち合わせ、反省を実施してきたが、そのなかに「子ども（参加者）」に参加してもらうことが充分できていなかった。聴き取り等で「やってみたいこと」「好きなこと」等のリサーチが一部はできてはいたが、話し合いの場に当事者である「子ども」が参加することが欠かせない。来年度は「子ども」たちが一緒に話し合える場を設け、子どもたちのニーズ

をしっかり把握し、共に理解し合あい、実践していく活動へとつなげていくことが課題である。

6. おわりに

本実践報告では、障がい児・者支援団体「育成会」と本学子ども学科が今年度1年間連携を取り、お互いを理解し、高め合えるような活動を実施してきたことについてまとめた。

初年度の活動とあって、活動目的を達成するため、試行錯誤を繰り返したはしたが、お互いの信頼関係を築くことはできた。

「障がいのある人・ない人」にかかわらず、人格を認め合う共生社会の実現を目指す活動の一環として、本活動を続けるとともに、今後も、大学における障がい児支援のあり方について、さらなる検討を続けていきたい。

謝 辞

本携活動を実施していくにあたって、いつも温かく学生を見守り、励まし続けてくださった、育成会 会長 石原眞季江様をはじめ、中川祐子様、奥田美由紀様、運営委員メンバーの方々には厚くお礼申し上げます。また、本稿執筆にあたって、多大なご協力をいただきました育成会の皆様に深い謝意を表します。

補 足

1) 「岡山市手をつなぐ育成会」について

1955年に岡山大学教育学部附属特殊学級と鹿田小学校の特殊学級の保護者、市内の小中学校長、障がい児研究委員会を中心に「岡山精神薄弱児育成会」として発足された。発足当初は、地域との関わりを深めること、知的障がい者の人権を守ることを目的とした。平成7年に「手をつなぐ育成会」と改称し、今日に至っている。現在は、障がい児の教育施設、福祉施設の拡充、障害児の安心できる地域生活支援会員相互の研修と親睦を重点に活動を行っている。

- 2) 今年度「親子サマースクール」は、岡山市地祉基金活用事業の助成金を受けて実施された。
- 3) 今年度「和太鼓サークル」「ダンス教サークル」「親子料理教室」「バス旅行」は、岡山いきいき子育て応援事業補助対象事業の助成金を受けて実施された。

引用・参考文献

- 朝日雅也(2010)「『当事者性』の共有で課題解決の協働を」『社会福祉研究』第109号、財団法人鉄道弘済会、1.
- 岡山市手をつなぐ育成会(2011),『育成会会報』第76号.
- 岡山市手をつなぐ育成会(2011),『知的障がい児・者の休日、放課後の余暇を支援する学生ボランティア育成事業 事業概要報告』
- 中野敏子・福知栄子・梅野潤子他(2008)『こうしてみようあなたの支援—ふりかえる・しっかり考える・進む—』大揚社.

表6. アンケート集計結果

1	この活動に参加する以前に、同じような障がいのある子どもたちとの遊びボランティアに参加したことはありますか？	はい	4	いいえ	10				
2	この活動に参加する以前に、障がいに対して知識や認識はどの程度ありましたか？	ほとんどない	10	少しある	4				
3	この活動に参加する以前に、あなたは障がい児に対してどのような感情や気持ちが浮かびましたか？	不安だった	10	怖かった	1	疑問があった	1	関心はあった	1
4	この活動に参加する以前に、障がい児と接する事に必要な知識や注意点はどのくらいありましたか？	ほとんどない	5	少しある	9				

5	この活動に参加する以前のあなたの障がい児と接する事に対する感情や気持ちはどうでしたか？	不安だった	5	不安だが楽しみ	6	抵抗があった	1	その他	1
6	2の質問に対して。ボランティアを終えて、ボランティアに参加する前と知識や認識はどのように変化しましたか？	変化あり	13	変化なし	1				
7	3の質問に対して。ボランティアを終えて、ボランティアに参加する前と感情はどのように変化しましたか？	変化あり	13	変化なし	1				
8	4の質問に対して。ボランティアを終えて、ボランティアに参加する前と知識や留意点はどのように変化しましたか？	変化あり	12	変化なし	2				
9	5の質問に対して。ボランティアを終えて、ボランティアに参加する前と感情はどのように変化しましたか？	変化あり	12	変化なし	2				
10	また参加したいと思いましたか？	はい	14	いいえ	0				

表7. アンケート集計結果（自由記述）

2	<ul style="list-style-type: none"> ・事前の打ち合わせで聞いた程度 ・テレビでみたことがある程度
3	<ul style="list-style-type: none"> ・関わったことがないからわからない ・自分に知識がないので、疑問だらけだった。 ・障害児を傷つけるのではないかと怖かった。
4	<ul style="list-style-type: none"> ・無理をさせない。 ・言語障害がある場合は顔の表情をよく見る。 ・仕草や表情をよく見る。
5	<ul style="list-style-type: none"> ・関わったことがないから不安だった。 ・どういう態度を取ればいいのかわからず、不安だった。 ・コミュニケーションを取るのが難しそうなので抵抗があった。 ・自分自身が知識を得ることができるので楽しみだった。 ・不安はあったが、ふれ合えることが楽しみだった。
6	<ul style="list-style-type: none"> ・何もできないと決めつけていたが、そんなことはなかった。 ・言葉がなくても表情や仕草で伝わるものは多くあると思った。
7	<ul style="list-style-type: none"> ・「障害」を見る目や気持ちが大きく変わった。 ・自分も素直になることができた。 ・不安はあるが、自分自身がその子を受け入れることが大切だと思った。
8	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと自分自身が知識をつけるべきだと思った。 ・保護者とのコミュニケーションも大切であることがわかった。 ・個人差があるので一人一人の特徴をよく知った上で、より楽しんでもらえるようにすることが大切だと思った。
9	<ul style="list-style-type: none"> ・不安に思っていたことが、子どもたちと接していく中でどんどんなくなっていった。 ・参加後は不安よりも、知識や経験を得たという気持ちが強くなった。 ・自分のイメージとは違い、関わることは楽しいと思った。